

2024 年度 日産財団理科教育助成 成果報告書

テーマ：「未来型授業（SDGs×STEAM×GIGA×PBL+インクルーシブ）」で
未来社会を切り拓く力を育む

学校名：愛川町立半原小学校

代表者：山中 隆

報告者：中山 竜巳

全教員数： 27名

全学級数・児童生徒数： 14学級・223名

実践研究を行う教員数： 16名

実践研究を受けた学級数・児童生徒数： 14学級・223名

1. 研究の目的（テーマ設定の背景を含む）

子ども達が生きていく未来社会は、不安定・不確実で予測困難な「VUCA」の時代と言われている。

そこで、OECDが提唱する『ラーニング・コンパス2030』を参考に、これからの時代を生きていくために必要な「未来社会を切り拓く力」として、本校独自に右記「6Cの力」を設定した。子ども達が自分達の住む半原という地区のよさを再発見すると共に、諸課題を解決しながら、あるべき半原の姿を考え、町内外に半原のよさを発信していく協働的な学習である。

その際、「SDGs」の17の目標を学習課題に絡め、「STEAM」教育が成立するように教科横断的な単元計画をカリキュラムマネジメントする。また、学習を進めるにあたっては「GIGA」スクール構想で整備されたICT環境をフル活用し、「PBL」の探求的プロセスで進めていく。さらに今年度は「インクルーシブ」の視点を大切にして授業をつくることとした。この「SDGs」「STEAM」「GIGA」「PBL」「インクルーシブ」の相乗効果を図る授業を「未来型授業」と名付けた。

未来型授業 = SDGs×STEAM×GIGA×PBL+インクルーシブ→6C

つまり、上記英数式のようなものが、本校が取り組んでいる研究概要を示すキーセンテンス。「未来型授業」を行うことにより子ども達に「6Cの力」が育つであろう、という仮説を立てて取り組むことになった。



2. 研究にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

本研究を進めるにあたって、神奈川県教育委員会の「かながわ学びづくり推進地域委託校」の指定を受け、指導・助言をいただきながら研究を進める体制を整えた。

また、本研究のスーパーバイザーとして大村龍太郎氏に6回来校していただき、講話をいただいたり授業を参観・指導助言していただく体制を整え、全教職員が「未来型授業」への取り組みを深めていくこととした。

さらに、大型超単焦点プロジェクター2台やAppleTV10台の環境を整えることにより、全校児童に高画質で研究発表を行ったり、教室等で気軽に児童の研究発表リハーサルできる体制となった。

3. 研究の内容

今年度は、昨年度の研究を受けて、子ども達が自分達の住む半原という地区のよさを再発見すると共に、諸課題を解決しながら、あるべき半原の姿を考え、町内外に半原のよさを発信していく学習を継続して進めた。その際、「SDGs」の17の目標を学習課題に絡め、「STEAM」教育が成立するように、教科横断的にカリキュラムマネジメントを行った。また、どの時期に何を行うのか、子ども達にも他学年の先生達にも可視化して説明できるよう、「未来型授業カレンダー」を全学年で作成した。そして、学習を進めるにあたっては「GIGA」スクール構想で整備されたICT環境を積極的に活用し、「PBL」の探求的プロセスを有効に活用して進めていった。さらに、今年度は今まで本校で実践してきた「インクルーシブ」の視点を加えて、「交流」をキーワードにして研究を進めた。

本校では、この「SDGs」「STEAM」「GIGA」「PBL」「インクルーシブ」の相乗効果を図る授業スタイルを「未来型授業」と名付け、それを進めるにあたっては、東京学芸大学准教授の大村龍太郎などにご助言いただきながら研修会を実施した。

各学年の授業実践内容は次のとおり。

■ 1年生：『春夏秋冬を楽しむ』

「アソビを通して、春夏秋冬を満喫する」をコンセプトに「ものづくり」を多く取り入れ、学習したことや感謝の気持ちを形にしてきた。

3学期には新1年生を含む幼稚園・保育園の園児を招き、「半原小でいっしょにあそぼうの会」として、今まで学習したことを思い出しながら、優しい言葉かけをして交流できた。

■ 2年生：『野菜ワクワク大作戦』

野菜嫌いな児童も多い学年だったが、1年間を通して野菜を育て、育てた野菜を食べたり、コキアの栽培、加工してホウキ作りをしたりと体験を通して学びを深めてきた。近所の農園で大根の収穫や蜂蜜の蜜を絞る様子を見たり、野菜の育て方をおしえてもらったりした。

■ 3年生：『もっと知りたい 伝えたい 半原調査隊』

身近にある自然について調べ、動画などにまとめた。まず、1学期には、校庭の周りにいる生き物を探し調べた。さらに、昆虫博士から話を聞き、虫マップにしてまとめた。2学期には、学校の周り（ふれあいの村、ホタルの里など）にはどんな生き物がいるか探し、グループごとに調べ、動画などにしてまとめた。そして、3学期には、発表の仕方を考え、発信した。

■ 4年生：『輝け☆愛川エネサイクル！』

愛川町内のエネルギー・発電やりサイクルの流れを調べ、グループで動画を作成した。1学期は、ペットボトルリサイクルについて外部講師から学んだ。2学期は、水とエネルギー館、宮ヶ瀬ダム、服部牧場などを見学し、身近なエネルギーや環境への取組について学んだ。

■ 5年生：『半原プロジェクト～未来の半原は僕たちがまもる！～』

自分たちが住む「半原」という町の魅力を知り、未来に残したいもの、未来につなげたいことを考える活動等を通して、この町を大切にしたいという気持ちを育ててきた。

「過去」「現在」の半原について複数の外部講師から学び、「未来」の半原を考え、考えたことを具体的な行

未来型授業カレンダー 1年「みんなみんな いきている～春夏秋冬を楽しむ～」

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	おどろきなつた											
算数M	しらべたいな、見せたいな											
生活STE	きれいにきいてわたしのほな											
特活	はるをみつけにいこう											
道徳	みんなであそぼう											
図工A	おどろきなつた											
音楽A	おどろきなつた											
学行	おどろきなつた											



動に繋げることができた。

■ 6年生：『みんなで恩返し 半原小に6年間の感謝を伝えよう』

6年間のすべてに感謝して、その感謝の気持ちを伝える活動を通して、高学年としての自信をつけさせたいと考えた。

子どもたちのアイデアを生かしつつ、子どもたちの得意な分野をどう引き出しながら活動をしていくか考え、また、ペア学年や下級生と交流する中で、感謝される経験、人に必要とされる経験、自己有用感を感じられるような実践を進めてきた。



4. 研究の成果と成果の測定方法

研究の授業実践を通して、子ども達はそれぞれの学年テーマに向かって、主体的・対話的・協働的な学びを深めたと考える。特に今年度は「未来型授業カレンダー」を意識して年間を通じて「6Cの力」を意識して力を伸ばすことができた。

■ 1年生：『春夏秋冬を楽しむ』をテーマとして「ものづくり」を多く取り入れ、いろいろと話し合った結果、春夏秋冬のゲームセンターを開くことになった。3学期に新1年生を含む幼稚園・保育園の園児を招き、「半原小でいっしょにあそぼうの会」でゲームコーナーを作り、思いっきり楽しませることができた。また、お世話になった2年生もゲームセンターに招いた。2年生は夢中になって楽しんでくれた。



■ 2年生：『野菜ワクワク大作戦』をテーマとして研究を進め、野菜ゲームセンターを作ることになった。1年生のよいお手本となり、野菜好きになるよう工夫をしながら楽しいゲームセンターを作ることができた。



■ 3年生：『もっと知りたい 伝えたい 半原調査隊』をテーマとして、学校の周り（ふれあいの村、ホタルの里など）の生き物について研究を深め、動画やプレゼンなどを積極的に制作できた。そして、多くの学年の児童に進んで発表することができた。



■ 4年生：『輝け☆愛川エネサイクル！』をテーマとして研究を進め、いろいろな校外学習を通して特にSDGsについて自分事として研究を深めることができた。その成果をプレゼンや動画にまとめて、他学年に説得力ある発表ができた。



■ 5年生：『半原プロジェクト～未来の半原は僕たちがまもる！～』をテーマとして、校外学習や講師からの学び等で研究を深めた。そして半原をきれいにしたいという思いから、清掃活動を実施し、たくさんのゴミを拾う中で自分事として考えるようになり、環境保全のためのポスターや



動画などを積極的に作り、地域に掲示したり、全校に放映したりすることができた。

■ 6年生：『みんなで恩返し半原小に6年間の感謝を伝えよう』をテーマとして、1年生に学校生活に早くなれてもらうために、朝の支度や昇降口からなかなか教室に上がれない子のお迎えや、休み時間の遊び相手など1年生の手助けをする活動を行った。愛川ふれあいの村に出かけてのレク活動や、新年の凧作り、凧揚げの補助も行った。その他にはタブレットの贈呈式を行い、タブレットの

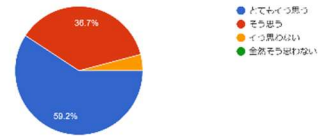


使用方法やルールなどを教える活動を行った。お世話になった先生や見守ってくださった地域の方々に向けて家庭科の授業で感謝の気持ちを伝えるプレゼントづくりを行い、手渡しでプレゼントした。また、校内の奉仕作業としての活動をした。

「6 Cの力」についての児童アンケートを4月と2月に実施した。アンケートに「6 Cの力」が伸びている結果が多く表れている。例えば右の結果は好きを合わせると4月は約80%だったのに対し2月は95%強となり「協力する力」が伸びていることが分かる。

私は、友だちと一緒に考えるのが好きです。

49 件の回答



5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践研究の可能性や発展性など）

「この時間に身につける力」として、授業の冒頭に「6 Cの力」のアイコンを掲示して、子ども達に「6 Cの力」を意識させ続けてきた。その結果、「6 Cの力」は自分の将来に必要であることを知り、「6 Cの力」を伸ばすことを意識しながら学習するようになってきた。「未来型授業」を引き続き実践することで、着実に「6 Cの力」を伸ばせるようにしていきたい。次年度は、今年度の研究をベースに「未来型授業」を通して「6 Cの力」をいかに育んでいくか、さらに研究を進めていきたい。その中で、今年度課題となった子どもが学習を自分事ととらえ、学習を進めていけるか、どうサポートするか研究を進めていきたい。

また、「未来型授業」による「SDGs」「STEAM」「GIGA」「PBL」「+インクルーシブ」を融合させた教科横断的な授業手法、そして、地域教材を活用した「未来型授業カレンダー」は、本校が受け継いでいくべき貴重な教育財産になるはずである。

今回、「未来型授業」を行う中で異学年交流が多く行われた。例えば6年生が1年生にタブレットの使い方を教えたり、凧作りを手伝ったり、また、4年生が3年生に動画の作り方を教えるなどを実践した。低学年においては、マンツーマンで教わるのでストレスフリーで非常に効率的に学ぶことができる。一方、高学年においても、右「教えることで効果的に学ぶ」ことが可能となった。次年度は、こうした異学年交流による学習活動をさらに充実させたいと考えている。

6. 成果の公表や発信に関する取組

※ 研究会等での発表や、メディアなどに掲載・放送された場合もご記載ください

神奈川県、県央地区の「学びづくりシンポジウム」（地区の教員や地域の方々約130名参加）で本校の実践報告だけが行われた。その後、シンポジウムのパネリストを本校研究主任が務め、本発表の内容理解をさらに深めることができた。

厚木愛甲地区の研究会で、昨年度作成された「世界初！旅行情報誌風校内研究紀要 るるる半原」を配布しながら、本研究の研究発表を行った。

7. 所感

学校全体で「未来型授業」に取り組んだ。全教職員が子ども達の思いを大切にしながら、学年テーマを設定し、「未来型授業カレンダー」を作成し、実践してきた。子どもたちが、半原のすばらしさを深く研究し、自分事として考え、発信したいという気持ちを高めて、様々な形で発信できたところが研究の大きな成果であった。また、保護者や地域の方々に「るるる半原」を配付することで、多くの方々に「未来型授業」の内容を知ってもらい、研究に関心を寄せていただくことができた。

日産財団理科教育助成の研究に取り組み、学校が一枚岩となり、学校と地域の一体感の醸成や学年間の豊かな交流に成功した。